氏　　名（本籍）	嶋田　聡（日本）
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	甲第83号
学位授与の日付	平成27年3月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	黄得時と台湾新文学－日本統治期の台湾における文壇建設と文学的価値の創造
論文審査委員	主査　愛知大学教授　黄　　英　哲
	副査　愛知大学教授　松　岡　正　子
	副査　愛知大学教授　薛　　鳴

博士論文要旨

黄得時と台湾新文学―日本統治期の台湾における文壇建設と文学的価値の創造

07DC1501　嶋田　聡

本論文は、20 世紀を通して台湾の文芸批評や漢文学研究の世界における中心的人物であった黄得時（1909-99）の、日本統治期における文学活動について研究したものである。

黄得時は著名な漢詩人である黄純青の三男として生まれ、幼少の頃より伝統的な漢文教育を受けて育った。そして、青年期になると台北高校から台北帝国大学へと進み、まさに島内では「本土エリート」であった。本論文では、その「本土エリート」としての黄が、日本統治期の台湾新文学運動の文壇においてどのような役割をはたしたのかという問題意識のもと、当時の文壇の発展史と、そのなかでの黄の文学的営為を「文壇建設」と「文学的価値の創造」というキーワードによって考察した。

第一章では、黄得時の新文学運動における活動の原点ともいえる台湾文芸協会の性質と、そこでの文壇の形成過程を「自由主義」という視角から考えてみた。そして、黄得時と厨川白村との思想的なつながりを分析し、当時の文壇における「表現モデル」としての厨川白村文芸論のもつ可能性を探るとともに、当時の「自由主義」と「プロレタリア思想」との違いについても言及した。こうした論考により、台湾文芸協会の活動は、当時の黄得時の文壇建設における理想が具現化されたものであることをつきとめた。

第二章では、「メディアの発展」という中心的な話題を軸にして、1920 年代に始まる台湾新文学運動の歴史を振り返り、文壇形成におけるメディアの役割について考察した。とくに、「台湾人の舌」と呼ばれていた『台湾民報』については、歴史的発展過程を詳細に見ながら、新文学運動との関係について考察してある。

この第一、第二章を通じていえることは、黄得時の思想がもともと自由主義的な面を強くもっていたということ、さらには黄自身にとっては、漢文での表現や中国文学に関する知識が非常に大事であったということである。これはやはり、黄が伝統的「読書人」の家庭に育ったからであり、台湾における「エリート」としてはごく当たり前のことだったといえる。つまり、黄が他の「日本語世代」の文学者たちに比べて日本語への切り替えが遅れたのは、その当時は

まだ台湾の上層社会が漢文を必要としていたからであり、文壇の中心にいるためにはそれが手放せなかったからだと思われる。また、「自由主義」ということでいえば、黄得時と「ファシズム」を標榜する西川満との思想の違いについても詳細に分析した。やはり、この二人の対立とは、民族対立ではなく、あくまで思想的な対立であったとここでは結論づけている。

第三章では、まず「帝国アカデミー」というキーワードを用いて、黄得時と近代学術との関係を見てきた。この 1940 年代は、この「帝国アカデミー」と在台日本人ナショナリズムの時代であったといえる。したがって、黄得時はどちらかというと中村哲などのリベラルな在台日本人のナショナリズムに寄り添うかたちで当時の文学活動を行っていたといえる。それと同じように、学術界においても、台北帝国大学を中心とする「帝国アカデミー」が席巻し、黄得時もその動きに引っ張られるようにして文壇生活を送っていたのである。この時代に黄得時にもたらされた一番大きな変化とは、「東洋学」的な「知」を身につけたことにより、自ら「台湾」を「発見」できるようになったことであると結論づける。

最後に全体の結論として、黄得時のようないわゆる「本土エリート」が、この日本統治期台湾の文学的発展においては一つの鍵を握る存在だったということを指摘し、本論を終える。

審査の結果の要旨

本論文は、日本統治時代後期から戦後を通して常に台湾文学界の中心にいた黄得時の文学活動をおもな考察対象として、日本統治期の台湾文壇の構築や「台湾」アイデンティティの構築において黄がはたした役割について分析することで、植民統治下台湾の文学的「発展」を明らかにしようとするものである。さらには、黄得時をはじめとする当時の台湾人文学者たちが、植民統治という上からの近代化を経験するなかで、自らのナショナリズムの対象として描いた「台湾文学」の核心について探求するものである。

黄得時は、1930年代初頭に台湾新文学運動の関連メディアに登場し始めてから、生涯にわたって台湾文学界の中心的存在であり続けた、台湾の近代を代表する知識人「本土エリート」である。日本統治期においては文芸評論や文化評論、それに文学史研究や新聞の文芸欄の編集などの分野で活躍し、戦後になってからは台湾大学の教授として引き続き文学研究や日本における漢学史の研究などの仕事にたずさわり、数々の評論やエッセイ、それに講演記録等を残した。それゆえに、彼の文学活動を詳細に見ていけば、日本統治期と戦後の台湾文壇を連続的な視野で捉えることが可能となり、その時々の文壇の全体的な動向も把握し得るというのが、本論文において筆者が黄得時をその研究の中心点に据えた理由である。

本論文では、日本統治期の台湾文壇の構築について、「文壇建設」と「文学的価値の創造」という二つのキーワードを用いている。台湾においては戦前・戦後を通じて国語の普及が外来の統治権力によって強制的に行われ、国語と各エスニック言語との間に明確な「支配」「被支配」関係ができてしまった。このようなエスニック・アイデンティティと文化主体の問題が複雑に絡まりあう状況のなかで、黄得時がどのような理想を抱き、いかなる理念のもとにその時々の台湾文壇を建設しようとしていたのかという問題と、「自由主義」的近代性の追求のなかで、彼がどのように「台湾」あるいは「台湾文学」という価値を「発見」し、また「創造」してきたのかという点について論じている。

第一章「台湾文芸協会の時代」では、黄得時個人の思想や文学観、文壇での立場の確立について論じる上で、台湾文芸協会時代の活動についての考察が不可欠であるとし、まず彼の生い立ちから文学にかかわる経験について抽出し、1932年と翌年に『台湾新民報』に発表された2編の論文にあらわれた彼の主張がいかなる基盤のもとに形成されたのかを分析している。そのうえで黄得時の新文学運動における活動の原点ともいえる台湾文芸協会の文壇の形成過程について、「自由主義」という視角から考察していく。台湾文芸協会の会則にあらわれた彼の主張や厨川白村文学論から受けた影響について詳細に分析することで、リアリズムや文芸大衆化への欲求から台湾におけるナショナリズムが形成され始めた1930年代において、黄得時はすでに台湾特有のアイデンティティの複層性を認識し、自らが属するエスニック・グループだけに根ざすのではなく、「台湾大」のナショナリズムを構築することの必要性を説き、自分たちが台湾全体の文化発展に寄与するための具体的な方法論とその熱意を示し得ていたことを明らかにしている。

この論証から、筆者は、黄得時の社会全体を俯瞰する視野の広さと、学問的公平さによ

って台湾を観察し、そこから新文学の発展を考えるという、オピニオン・リーダーとしての時代に即した視点を彼が確保していたことこそ、黄得時が文壇の中心に居続けられた要因であったのではないかとする。ともすれば各自が狭い意見に固執するあまり分派闘争に陥り、それゆえ停滞感のあった当時の台湾文壇において、黄得時のような文学的立場や思想をもつ「本土エリート」は、文学者同士がまとまるために必要な存在だったのではないかと論じている。

第二章「文壇建設と「台湾」的価値の追求」においては、文壇形成におけるメディアの役割に焦点をあてながら、台湾新文学運動の歴史を振り返るとともに、黄得時の文学に対するイデオロギーやナショナリズムについて考察している。1920 年代に始まりをみせた台湾新文学運動は、もともと台湾人の「抗日」的民族運動から始まったものであり、「台湾」アイデンティティの形成には『民報』系新聞メディアが大きく寄与した。ところが 1931 年の霧社事件の影響による左翼活動家の大量検挙を契機に、社会運動は政治闘争から引き離された文学運動へと移行していく。それにつれて活動の母体も新たに創刊された多くの文芸誌が担うこととなり、1934 年台湾文芸聯盟の結成によって台湾全島的な「文壇」の形成へとつながっていく。1936 年の「台湾文学界総検討座談会」では、日本内地文壇との連携が叫ばれるなか、黄は台湾文壇の主体性について訴え、また文壇の建設にとってメディアが重要な存在であると発言している。

筆者は、黄得時が学者肌の評論家であり、常に自分の得意とする「中国文学研究」の領域において自己の文壇における地位確立に成功したと分析し、新文学運動への参与の仕方についても、一貫してメディアの普及を通じて文壇全体の隆盛をめざしていたのではないかと推論している。

第三章「「地方文化」の確立と新たな文壇の形成」は、「帝国アカデミー」というキーワードを用いて、1940 年代からの台湾文壇において黄得時がいかに活動したかについて論述している。1920 年代は台湾人のアイデンティティの証として中国白話文普及運動が起こり、文学の表現言語は「中国白話文」や「台湾話文」が主であったが、30 年代後半には植民統治による日本語教育の普及とともに日本語での創作が増え、文学者たちの間で表記言語へのこだわりが薄れはじめる。1937 年の日中戦争勃発を発端に皇民化政策が強化され、メディアでの漢文禁止令が出されると、中国語で創作していた作家たちは発表の場を失い、島内文壇は活動が一時停止してしまう。その後 40 年に入ると、植民地支配がよりいっそう進み、台湾人の文化主体が帝国の「地方文化」というカテゴリーに呑み込まれてしまう状況が生まれ、運動の主体も中文作家から日文作家へと移り、主導権を在台日本人が握るようになった。「帝国アカデミー」主導のなかにあって黄得時がいかにして「台湾文学」という主体を打ち立てようとしたのかを『民俗台湾』創刊の意図や「台湾文学史序説」の執筆動機や内容構成に着目しながら考察している。先行研究には、この時代の文化主体の確立と黄得時の役割に関して、民族主義の立場から「台湾人」側に立脚した黄得時の文学史的主体や政治的立場の正当性を評価する視点で論じるものが多い。これに対して筆者は、1943 年『台湾文学』に「台湾文学史序説」が発表されたことの意義について、植民地下にありながら彼が日本、中国、台湾を相対化して並べ、台湾が他の二国と同等に扱われるべきと主張しており、あくまで台湾という「場所」に根ざした「本土主義」を主張しているところにあるとしている。

日本統治期の台日混合の台湾文壇にあって黄得時がなぜ中心的な人物であり続けられたのかという問題に対して、筆者は、黄得時があくまで「内台混合」での自由主義的な文壇の建設とその発展を目指していたことにあると分析している。日本統治期の台湾においては黄得時のようなリベラルな「本土エリート」は、統治者側からも被統治者側からも信頼される存在だったのではないかとし、黄自身それを自負していたからこそ、皇民化が進む状況においても、社会状況にとらわれずリベラルな態度で自由主義的な言説を繰り返すことができたのではないかと推論している。そして、植民地体制下、黄得時のような「本土エリート」が統治権力をも巻き込むかたちで社会を発展させていったのではないかと結論づけている。

本論文に関しては、特に評価できる点は以下の二点である。

一、　黄得時をとりまく状況として、台湾新文学運動においては文学の表現言語と思想的政治的立場が必ずしも一致しないという台湾特有のアイデンティティの複層性についての究明がなされていて、非常にオリジナリティーがある。

二、台湾文壇の構築を論点にしているため、当時の文壇の動きが表現言語の転換と密接に結びついていたことが明らかにされている。

望蜀の感ではあるが､本論文を出版する場合は､以下の二点を改善することが望ましい。

一、　当時の台湾における文学に影響を与えたであろう中国や日本の文壇の動きについても、少し考察を加えたほうがより時代の流れが意識できるのではないか。

二、　言語の転換に対する民衆への影響についてはもう少し論じてほしい。黄得時が主張した「台湾大」ナショナリズムとしての文学的発展は民衆レベルにまで浸透し得たのかという問題を考える上では、論じられてもよかったと思われる。

本論文は、執筆者自身が「台湾戦後文学に関する戦前との比較研究のための第一歩」と位置づけ、黄得時を軸とした日本統治期における台湾文壇についてまとめたものである。本委員会は２０１４年１１月２７日に予備審査委員会を開催し、本審査に入ることを可とし、その後２０１５年1月２６日に本審査委員会を開催して、審査委員会は本論文を博士学位授与に値すると判断した。

以　　上